The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本近代における女性教師表象の変容と展開
Author(s)	小橋, 玲治
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/55687
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　小橋　玲治　　）	
論文題名	日本近代における女性教師表象の変容と展開

論文内容の要旨

本論文は、小説などの近代的なテクストの中で、同じく近代に登場した「女性教師」なる存在がいかに表象されてきたかを踏まえ、その表象が同時代を背景とした中でどのような意味を有し、作中でどのような機能を担っていたのかを考察するものである。本論文は、女性教師を通時的な時代の流れの中で捉えていくことで、その表象の「変容と展開」を追うことに主眼を置く。女性教師表象を扱った先行研究は、作品を分析して析出されたものを提示しているが、本稿は、その析出したものを再度物語の中に置換し、物語の再解釈を試みることを目的としており、教師を職としている女性が登場しているという事実が、その作品の中でいかに有機的に機能しているのか、もしくは空転しているのか、それを見定めるものである。女性教師が小説のモチーフとして語られる上で、（少なくともある時期までは）必ずと言っていいほどに「結婚」が話題となってくる。それは女性教師表象に嵌められた軛とも言えるものなのだが、それから解放された（もしくは最初から気にもしていない）作品も時代を経るにつれ登場することとなる。それは決して「突然変異」ではない。そのような表象が生まれるからには、それが時代背景によるものなのか、作者自身の個人的な理由によるものなのかは各々異なるであろうが、何らかの要因があるはずなのである。

したがって、本論文で明らかにするのは、「結婚出来ない」存在という枠組みの中でしか扱われてこなかった女性教師という表象が、いかにその狭隘なバイアスから脱し、より広範なコンテクストへと至るのか、というところにある。固定化したイメージに打ち込まれる〈楔〉は一つとは限らない。それぞれの〈楔〉にはそれぞれの理由があるはずであり、本論文ではそれが何であるのかを、個々の事象を分析していくことで解き明かしていく。

第一部では、女性教師が現れた時代の、彼女たちを取り巻いていた言説について確認した。河竹黙阿弥『富士額男女繁山』（『女書生』）では主人公は女性のまま教員を目指すのではなく、男装をして教員になろうとする主人公を描いた。敵討ちを果たした繁は捕縛されることになるが、元を糺せば男装自体が御法度破りであり、それがために御家直に脅される。女が教育を受けているから世間から排除されるという訳ではないのである。しかしながら、末広鉄腸の『雪中梅』では女性の身で教育を受けることと不品行とが何のためらいもなく接続しうることが仄めかされ、それは嵯峨の屋おむろ「くされたまご」や山田美妙『教師三昧』の中の女性教師として表象化されることとなった。そこでは、「束髪のふしだら」として、女性教師と女学生の立場は言説の上では未分化だったのである。また、初期の女性作家たちは女性教師そのものを描くことはしなかったものの、「書かない」という選択によってその暗いであろう未来を暗示しており、石橋思案の「わが恋」を取り上げることで女性教師の恋愛を描くことの不可能性を論じた。

明治 20 年代までの女性教師表象は、その後の表象を胚胎するものであった。これを受けて、第二部では、「女学生小説」において女学生と女性教師の対立構造が見られることを明らかにし、女学生に嫌悪される女性教師がそこに現れるということを提示した。そして、その際に問題になるのは、女性教師が「結婚出来ない」存在として規定されていることであり、その規制は女性教師表象にその後もつきまとうものとなっている。

第三部では、そのような女性教師表象が現れる時代に、現実の女性教師たちがどのような活動を行っていたかということを、20 世紀初頭に見られるようになった女性教師の海外派遣という事象から解き明かしていった。しかしながら、そのような現実における女性教師たちの活躍とは裏腹に、表象としての女性教師の海外渡航は、恋愛に敗れた末の逃避といった、ネガティヴなものへと作家たちの手によって転換されていったことを明らかにした。

第四部で扱ったのは、「家庭」を背景とした女性教師、すなわち「女性家庭教師」である。「家庭」を背景とするこ

とで、それは「学校」を背景とする女性教師とは自ずからその役割が変わってくる。また、女性家庭教師表象はそもそもが英国など海外の文学作品にその由来を持つものであり、翻訳作品からの享受から、そして最終的に永井荷風の『地獄の花』に至る過程を、多くの翻訳作品や現実の女性家庭教師を取り上げながら検証していった。

第五部は、女性教師表象の転換期について考察した。それまでネガティヴな意味合いに陥りがちであった女性教師表象ではあるが、石川啄木はその当初から女性教師を否定的なまなざしから捉えるという姿勢から解放されており、先駆的な「作家」であったと言えるだろう。啄木同様教師経験、それも管理職まで務めた後作家に転じた小笠原白也も、生徒たちから慕われる女性教師を描いたものの、実際には内実に乏しいものであり、また、それまでの「結婚」という言説にも引きずられ、その女性教師表象はその二つの描き方の中で引き裂かれた表象となってしまっていた。そこから完全に脱していたのが有島武郎の「一房の葡萄」であった。有島は子どもの視線を導入することにより、女性教師表象に新たな視座を与えた。その「一房の葡萄」と時を同じくして起こったのが、小野訓導殉職事件であった。小説以外のメディアが多く台頭していく時代の中で、彼女の死の意味合いは大きなうねりとともに、一つの方向性へと導かれていった。そして、女性教師の死の意味合いが確定したのは、吉岡訓導の死によってである。彼女の死を契機に大阪に教育塔が建造され、ここにおいて教師の死は国家に殉じたものとして一つの意味に統合されるに至ったのである。

補論では、個々の章で折に触れて取り上げていた女性教師を図像化したもの、すなわち可視化された女性教師表象について取り上げた。表象を扱う上では言説のみならず、視覚で捉えられるものも重要であるが、通事的なものでもあるため、本論文ではいずれかの章にまとめるのではなく、補論という形で扱った。

以上、本論文によって検討していった女性教師表象についてまとめたが、当然のことながらここから零れ落ちているものも多く、むしろそれが女性教師表象を研究する上で重要なものもある。その一つが、第五部の注でも挙げた「老嬢」なる概念である。女性教師にまつわる言説の中で不即不離な関係にあるこの言葉だが、本論文では結局取り上げるには至らなかったのは、痛恨の一事である。今後女性教師表象をさらに研究していく中で、何らかの形で答えを出したいと考えている。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　小橋　玲治　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主査　大阪大学　准教授	橋本順光
	副査　大阪大学　教授	清水康次
	副査　大阪大学　教授	中直一
	副査　大阪大学　教授	北村卓
	副査　筑波大学　准教授	平石典子

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　日本近代における女性教師表象の変容と展開

学位申請者　小橋玲治

論文審査担当者

主査　大阪大学准教授　橋本順光

副査　大阪大学教授　清水康次

副査　大阪大学教授　中直一

副査　大阪大学教授　北村卓

副査　筑波大学准教授　平石典子

【論文内容の要旨】

本論文は、明治から昭和にいたる近代日本において、女性教師がどのように表象されてきたのかを通時的にとりあげている。河竹黙阿弥の『女書生』に象徴される「男装の女性」として興味本位か否定的にしかとらえられなかった存在が、英国のとりわけガヴァネス（小説）などとの接触から従来の「乳母」や「女中」などと習合しつつ、帝国の尖兵や教室内の母として描かれ、1922 年および 1934 年の「殉職」事件を契機として国へ奉仕する存在へと統合されることが指摘される。

第一部「初期の女性教師言説」は、明治における女性（家庭）教師の出現とそれをとりまく言説が、語義の変遷や統計資料をもとに整理され、黙阿弥の『女書生』、末広鉄腸の『雪中梅』、山田美妙の『嫁入り支度に教師三昧』などの作品で否定的に描かれていることを指摘している。

第二部「「女学生小説」の中の女性教師表象」では、小杉天外の『魔風恋風』と小栗風葉の『青春』を中心に、女性教師が女学生と対立する「「結婚できない」存在」として規定され、男性領域への侵犯が喫煙や動物虐待反対運動などによって象徴されることが指摘される一方で、唐突にも見える海外への赴任という結末の重要性が確認される。

第三部「海を渡る女性教師という現象とその表象化」は、「内蒙古」に派遣された河原操子や暹羅に派遣された安井てつなど、20 世紀初頭に海外に派遣された女性教師の活躍の事績と、大月隆の『臥龍梅』などの小説に描かれた姿が対照的であることを、シャーロット・ブロンテの『ヴィレット』と対比しながら指摘する。

第四部「女性家庭教師の表象」は、英国のガヴァネス（小説）とその移入を、内田魯庵翻訳の『罪と罰』や「春風裡」、水谷不倒の中途で終わった『ジェーン・エア』の翻訳などからたどりつつ、ヘンリー・ウッドの『イースト・リン』とその翻訳および翻案の検証を経て、荷風の『地獄の花』といった独自の作品が誕生した過程を発掘する。

第五部「女性教師表象転換の時代に」は、啄木の「雲は天才である」と有島武郎の「一房の葡萄」を転換の例として指摘し、小野訓導殉職事件が国への統合という先例となったことを指摘している。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、上記の五部構成全 14 章、それに序論と結語、補論、年表を加え、全体で 261 ページ、本文と脚注だけでも 400 字詰め換算で 600 枚以上に及ぶ。このうち 4 つの章が、書籍に寄稿した 1 章、査読を経て学会誌に掲載された 3 本の論文を初出とし、それらは収録にあたってしかるべき改稿がほどこされている。

従来、ほとんど研究のなかった女性教師表象に注目することで、これまでほとんど論じられてこなかった作品を資料の博捜から発掘する一方、荷風の『地獄の花』といった著名な作品に新たな光をあてるなど、女性教師イメージの通史として、その多様性を描き出したことは高く評価された。

ただそれらの多様性は、女性教師表象の多面性として立体化することに成功しているというより、家庭教師から、小学校教員、女学校の教師など、時に性質が大きく異なる存在を「女性教師」として包摂したためという可能性は残念ながら否定できない。統計資料や、実在する女性教師についての事績を参照してはいるものの、それらが系統的に言及されるとはいいがたいことと、この問題は無縁ではないだろう。実在する女性たちとの対比も、それらは第三部に偏重しており、逆に転換期を論じる第五部においては、その重要性にもかかわらず訓導事件の分析のみが中心となり、そうした事件について関連する物語やテクストが言及されないのは不満が残る。

英語圏のガヴァネス小説についても、『ジェーン・エア』を代表にむしろそこでは結婚が大きな主題となっているにもかかわらず、英国の文脈やその交渉の分析は表面的なものにとどまっており、本文での挿絵分析と「日英の雑誌に見られる女性教師表象の比較」という補論が関係づけられなかったのは残念といわねばならない。明治時代における女性教師の海外派遣が、ケンブリッジ・ウーマン・ネットワークと関わるという興味深い指摘があり、エセル・ハワードといった英語圏からの女性家庭教師についての言及があるものの、それらが「一房の葡萄」その他のテクスト分析と相乗効果を生んでいないことも惜しまれる。

上記のような問題点が散見されるとはいえ、膨大な一次資料と関連する二次資料を、時に現地取材を行いながら女性教師表象という一点においてまとめあげ、その多様性を明らかにすることで今日の原型的なイメージの成立に至る道筋をつけたことは、今後の可能性を感じさせるものとして審査員一同から高く評価された。図像にみる女性教師表象や、英国のネットワークとの関連、そして周縁的な存在が国家体制に統合される過程など、ここから魅力的な主題が発展することについても強い期待が寄せられた。以上のことを鑑み、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。